文芸編集者から見た 小説の楽しみ方

久米 勲

小説の楽しみ方・読み方は、一つではありません。多くの人に親しまれてきた作品、教科書に載っている作品を、こんなふうに見ることがあります。

高校時代の国語の教師の話から始めよう。

教科書の小説を声に出して読む。あるところまで読み終わると、窓の外に目をやる。空を見上げていかにもそれらしく、「いいですねえ」と呟く。それ以外一切言葉を口にしない。

生徒は、どこがどう「いい」のか、さっぱりわからない。しかし私は、そのとき、「あ、これこそ文学だ、小説だ」と、ワクワクした。そしてこの授業が、私のその後の進路を決めたと言っても過言ではない。それはそれとして、小説ほど融通無礙なものはない。人というのは、一人として同じ人生を持つことはない。だから、作中のエピソードへの対し方も異なってくる。一つの作品の印象は、百人読めば百通りの姿をしている。どんな作品も、作者の手を離れたら、一切を読者の自由な鑑賞に委ねるしかない、ということだ。

作者はある意図をもって作品を書く。その意図を、テーマやモチーフや構成などから読み取ることはもちろん大切である。それとともに、どのように読んでいいのも、小説なのである。けれども、熟読すれば思いもよらぬ発見ができるのも、また小説だ。

「道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。」

川端康成作「伊豆の踊子」の、有名な書き出しである。一人で伊豆を旅する二十歳の高校生「私」が出会った旅芸人一座の十四歳の踊子薫との、恋とは言えない淡い憧れを抒情的に描き、永遠の青春の書とし

て、今や古典となっている。

「私」と踊り子の仄かな交流として読む。これはこれで十分に美しく、心に響いてくる読み方であり、何の問題もない。しかし……。

終わり近くで、高校生「私」は、自分のことを、旅芸人たちが「いい人ね」「それはそう、いい人らしい」「ほんとにいい人ね。いい人はいい人ね」と噂しているのを聞いて迷懐する。

「この物言いは単純で明けっ放しな響きを持っていた。感情の傾きをほいと幼く投げ出して見せた声だった。私自身にも自分をいい人だと素直に感じる事が出来た。晴れ晴れと眼を上げて明るい山々を眺めた。瞼の裏が微かに痛んだ。二十歳の私は自分の性質が孤児根性で歪んでいると敵しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪え切れないで伊豆の旅に出て来ているのだった。だから、世間尋常の意味で自分がいい人に見えることは、言いようなく有難いのだった。」

実に然り気なく書いてあるので、「私」と踊子との話に紛れてしまい、ついつい見過ごしてしまいがちな文章だ。だが、これがあることによって、この作品はただの恋物語では終わらないことになる。読者に、この若者の、そして作者川端康成のこれまでの人生を考えさせ、感じさせる。そこで初めて、踊子と高校生との心の絆が切っても切れないものだったと納得出来るということだ。

こつした一文に目を止めて、その作品のある深部に目を向けるのも、一興だろう。

さて、中学校教科書定番作品と言われているらしい大宰治の「走れメロス」につづろつ。

二十年来の友の身代りに人質となった男のために、約束を違えずに様ざまな傷害を乗り越えて帰って来たメロス。友情の強さ、美しさ、約束の大切さが、まさにその最大のテーマであり、モチーフであることは疑いを入れない。

だが、それだけだろうか。結末で、お互いが、一度だけが相手を疑ったことに対して、制裁してくれと言いい、互いに殴り合つ。そして、『ありがとう、友よ。』二人同時に言い、ひしと抱き合い、それからうれし泣きにおいおい声を放つて泣いた。」となると、友情以上の愛を感じてしまつのは私だけだろうか。

上田秋成の佳作「雨月物語」中の「菊花の約」と同じ男同士の間を。

そういう視点から、もう一度「走れメロス」を読み返してみると、全体の様相が変わってくる。メロスとセリヌンティウスの関係が、これまでと違った形で姿をあらわしてくるのではなからうか。

最後に、芥川龍之介の「トロッコ」を取り上げたい。

今も中学校教科書に載っているそうだが、私も中学生時代に教科書で読んだ。昭和三十年当時の教科書には、結末部分の校正者となった良平の感懐は掲載されていなかった。家に帰りついて泣く良平、という場面で終わる、単純な作品にしてしまったという訳だ。当時の編集者は、中学生向きであるなら、この結末部を削ったほうがわかりやすいと考えたのだろう。

だが、このような改変は、文学作品に対する大きな冒瀆である。作者である芥川が、校正者という職業に就いた良平の、八歳の時の事件とはまるで関係ない現在の心裡を結末に据えた意味を全く考えていない、思い上がった振舞だ。しかし、私の習った教師は、この後ろに結末部があるのだということは、教えてくれている。それは大変に意義ある教示だったと思う。

「全然なんの理由もないのに、そのときの彼を思い出すことがある。全然なんの理由もないのに、塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりそのときのように、薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している……。」

一人で帰る心細さと恐怖と悲しさが頂点に達した時、ようやく辿りついた家の玄関。そこで母にすがってワッと泣き出した良平。その描写のすぐあとに、大人となった良平のどこか淋し気な現在を示して、フツとはぐらかすように終わる。その芥川の意図を、子供たちは理解できないかもしれないが、作者の書いたとおりに呈示することが、非常に意味のあることなのだ。冒頭に紹介した私の高校の教師の姿と、これは繋がってくると思うのだが。

これらは単に、私の勝手な読み方にしかすぎない。言葉の世界に遊んだり、あるいは人それぞれ、自分に引きつけて読むことだってできる。そう、小説ほど融通無礙なものはないのだから。